

《書 評》

G. Carr & S. Stoddart (eds.), *Celts from Antiquity*,
(Antiquity Papers 2, Antiquity Publications Ltd,
Cambridge, 2002, 338 頁.)

疋 田 隆 康

は じ め に

本書は雑誌 *Antiquity* に掲載された論文 26 本を収録したものである。それらの論文は, 'Celticity', Continental Europe, The southern British Iron Age, The Scottish Iron Age の 4 部に分けられており, それぞれの部の冒頭に編者によるイントロダクションが付されている。全体の構成は以下のようなものである。

イントロダクション ジリアン・カー, サイモン・ストッダート

1. 「ケルト性」

ジリアン・カー, サイモン・ストッダート「イントロダクション」

G. クラフト「ケルト人の起源」(1929年)

J. V. S. ミゴー, M. R. ミゴー「古代ケルト人と現代のエスニシティ」(1996年) 他 3 本

2. 大陸ヨーロッパ

サイモン・ストッダート「イントロダクション」

ゲルハルト・ベルス「スイスにおけるヒルフォート」(1946年)

ヴェルナー・クレマー「マンヒングのオッピドゥム」(1960年) 他 5 本

3. ブリテン島南部の鉄器時代

ジリアン・カー「イントロダクション」

クリストファー・ホークス「鉄器時代ブリテン島の ABC」(1959年) 他 9 本

4. スコットランドの鉄器時代

サイモン・ストッダート「イントロダクション」

E. W. マッキー「円塔と鉄器時代ヘブリディーズ諸島」(1965年) 他 3 本

ジリアン・カー, サイモン・ストッダート「ケルトはどこへ？」

本書に収録されている論文は 1929 年から 1998 年まで約 70 年に亘っており, 内容も発掘報告に近いものから, 近年の「ケルト」を巡る論争まで, 様々である。

1 ヨーロッパの鉄器時代

本書の順番とは異なるが、先ずは Continental Europe の部から本書の内容を簡単に紹介しておこう。Continental Europe の部には、7本の論文が収録されているが、うち5本は特定の遺跡・遺物に関する報告もしくは論考である。Gerhard Bersu, “A hill-fort in Switzerland” (1946年)は著者が調査し、その前年に発表した発掘報告 (Id., *Das Wittnauer Horn im Kanton Aargau: seine Ur- und Frühgeschichtlichen Befestigungsanlagen*, Basel, 1945) の簡潔な要約である。Werner Krämer, “The oppidum of Manching” (1960年)は、現在知られている最大のオッピドゥム、マンヒングについての報告である。マンヒングについての本格的な調査は1955年以降、数次に亘って行われ、その成果は *Die Ausgrabungen in Manching* として刊行されている。Hartwig Zürn, “An anthropomorphic Hallstatt stele from Germany” (1964年)は1963～64年の調査によって、Hirschlanden から出土した戦士石像についての報告。この石像についての報告としては最も早い時期のものである。J. V. S. Megaw, “The Vix burial” (1966年)はヴィクスの女王墓について、特にそこから出土した混酒器に焦点を当て、その年代と出所を考察した論考である。なお、ヴィクスが発見されたのは1953年のことであり、上記の4論文とは異なり、著者が直接発掘に携わっているわけではない。J. Biel, “The late Hallstatt chieftain's grave at Hochdorf” (1981年)はホッホドルフについての報告であるが、この時点ではまだ出土品の分析などは完了しておらず、暫定的なものである。ホッホドルフについての精緻な分析は、後に Id., *Der Keltenfürst von Hochdorf*, Stuttgart, 1985 として出版された。

I. Ralston, “Central Gaul at the Roman conquest: conceptions and misconceptions” (1988年)と Anders Bergquist & Timothy Taylor, “The origin of the Gundestrup Cauldron” (1987年)の2本は、編者によれば、鉄器時代研究の近年の新しい発展を示すために収録されたものである。前者は、カエサルのテキストとフランス中部の居住地の調査を基に、一部の研究者によって、Archaic States Band と呼ばれているものの実態を考察したものである。ガリアでは、紀元前200年頃からカエサルの遠征の頃にかけて、「都市」を中心とした中央集権的な「国」が出現したことが知られているが、これが Archaic States と呼ばれているものであり、それらが緩やかに Archaic States Band と呼ばれる形で統合されていた、という説がある。それに対して著者は、カエサルのテキストとフランス中部の居住地の考古学調査から、Archaic States Band などと呼び得るようなものは存在しなかったと結論付ける。後者はゴネストロップの大釜についての論考で、ゴネストロップの大釜は非常に複雑なコンテクストを有しており、従来のように「ケルト」やトラキアのコンテクストのみに帰してしまうのは単純すぎることを指摘する。

The southern British Iron Age の部には本書中最も多い10本の論文が収録されている。

編者によれば、この分野において、20世紀には4点に関して顕著な進展が見られた。①年代研究 ②居住地、景観などに関する研究 ③丘砦 ④廃棄物についての考え方と解釈である。Christopher Hawkes, “The ABC of the British Iron Age” (1959年)は①に属するものである。彼は、early, middle, late や I, II, III などというような時代区分の代わりに、“Iron Age A”, “Iron Age B”, “Iron Age C” という「文化区分」を提唱し、それらによって鉄器時代を説明することを試みている。C. Evans, “Archaeology and modern times: Bersu’s Woodbury 1938 and 1939” (1989年)は、BersuによるLittle Woodburyの発掘からちょうど50年になるのを機会に、この発掘を当時の時代状況の中で捉えなおし、考古学と時代背景、社会との関係を論じたものである。R. E. M. Wheeler, “A prehistoric metropolis: the first Verulamium” (1932年), Leslie Alcock, “Excavations at Cadbury-Camelot, 1966–70” (1972年)及びGeoffrey Wainwright & Mansel Spratling, “The Iron Age settlement of Gussage All Saints” (1973年)は、それぞれVerulamium, Cadbury Castle, Gussage All Saintsの発掘報告である。David McOmish, “East Chisenbury: ritual and rubbish at the British Bronze Age–Iron Age transition” (1996年)は、Salisbury Plainの廃棄物の発掘である。廃棄物は近年の鉄器時代研究において、特に注目を集めている分野の1つである。I. M. Stead, “The Snettisham Treasure: excavations in 1990” (1991年)とA. P. Fitzpatrick, “The Snettisham, Norfolk, hoards of Iron Age torques: sacred or profane?” (1992年)は、Snettisham出土のトルクに関する論考である。Steadがこのトルクを宝物庫に保管されていたもので、奉納物ではないとするのに対し、Fitzpatrickは鉄器時代において、神聖なものと世俗的なものとの区別は明確でなく、またそれらはお互いに排他的なカテゴリーではないため、このトルクを奉納物でないと決めつけることは出来ない、と反論する。John Dent, “Three cart burials from Wetwang, Yorkshire” (1985年)はWetwang Slackで発見された3つの車葬墓についての、Rosalind Niblett, “A Catuvellaunian chieftain’s burial from St Albans” (1992年)はFolly Laneの発掘報告である。

The Scottish Iron Ageの部に収録された4本の論文は、何れもbrochと呼ばれる円塔の調査に基づく論考である。Euan W. MacKie, “Brochs and the Hebridean Iron Age” (1965年)は、ヘブリディーズ諸島の円塔を、建造当時のコンテキストの中に位置づけたもので、特にその年代の正確さは近年の発掘によっても裏付けられている。John W. Hedges & Bernard Bell, “That tower of Scottish prehistory—the Broch” (1980年)は、オークニー諸島Buの発掘を基に、その円塔の規模の多様性から、従来の形式論に異を唱えるなど、独自の見解を述べ、円塔研究における根本的な再検討の必要性を訴える。Sally M. Foster, “Analysis of spatial patterns in buildings” (1989年)は、access analysisをオークニー諸島の円塔の分析に応用し、空間の配置と社会との関係について考察することを試みている。Mike Parker Pearson, Niall Sharples & Jacqui Mulville, “Brochs and Iron Age

society: a reappraisal” (1996 年) は、先ず、従来の円塔研究を整理した後、ヘブリディーズ諸島のデータを基に、円塔を当時の社会的コンテキストの中におき、その重要性や目的を再考する必要があると説いている。

2 「ケルト」を巡る議論

編者によるイントロダクション, Gillian Carr & Simon Stoddart, “Whither Celts?”, 及び ‘Celticity’ に収録された 5 論文は、何れも近年の「ケルト」を巡る議論に関わるものなので、まとめて取り扱うのが適当であろう。先ず、イントロダクションにおいて、20 世紀の「ケルト」を巡る議論が簡単に紹介され、その後に続く論文の研究史上における位置付けがなされている。G. Kraft, “The origin of the Kelts” (1929 年) は *Antiquity* に掲載されたケルトに関する最初の論文である。彼はラ・テーヌ文化は「ケルト」の文化であるという前提に立ち、「ケルト」の起源を追求する。1980 年代まで、このような「ケルト」とラ・テーヌ文化との繋がりに対しては何の疑念も抱かれなかった。つまり、「ケルト」という言葉は、1980 年代までは議論されることなく、ブリテン諸島を含むヨーロッパの広範な範囲の鉄器時代を説明するために用いられてきた。Nick Merriman は 1987 年の論文 (“Value and motivation in prehistory: the evidence for ‘Celtic spirit’”, in I. R. Hodder (ed.), *The archaeology of contextual meanings*, Cambridge, pp. 111–116) において、「ケルト」というのは、様々な集団に対して、他の集団と区別するために、ギリシア人やローマ人によって与えられたラベルに過ぎない、すなわち「ケルト」という単一性は、分類に便利のように外部からの観察によって押しつけられたものである、と主張した。これ以降、イギリスの考古学者の間では「ケルト」を巡る議論が盛んになる。

1990 年代の 4 本は、以上のような背景があって出てきたものである。J. V. S. Megaw & M. R. Megaw, “Ancient Celts and modern ethnicity” (1996 年) に対する、コリスとジェームズによる反論、それらに対するミゴアの再反論という構成になっている。編者は “Whither Celts?” において、「ケルト」を擁護する考え方を old orthodoxy, 「ケルト」を否定する考え方を new orthodoxy と呼んでいる。ミゴア夫妻は old orthodoxy の代表格であり、コリスやジェームズは new orthodoxy の立場に立つ研究者である。先ず、ミゴアは、「ケルト」が外部から押しつけられたラベルに過ぎない、という点に関して、彼らの友人であるアボリジニーの女性の例を引き、置かれた状況やコンテキストによるアイデンティティの多重性を説く。ケルトについても同様であり、例としてウェルキンゲトリクスを挙げ、そのアイデンティティの多重性を、他者であるカエサルの記事に基づきながら示すことによって、「ケルト」を擁護する。

さらに、この論文の終わりでは、「ケルト」を否定する論調について、その原因を連合王国、とりわけイングランドの反大陸的な感情及びアイルランド、ウェールズ、スコットラン

ドなどへの支配権を失いたくないという政治的動機の2点に帰している。この部分は特に多くの批判を招いた。Simon James, “Celts, politics and motivation in archaeology” (1998年)は主にこの部分に対する反論である。ジェームズは、連合王国の大学の考古学部門に奉職している人々に関する、出身地別割合の表まで作成して、「ケルト」否定論がミゴーの言うような反大陸的感情やイングランドの政治的動機ではないことを示そうとする。この論文は徹底的なミゴー批判(寧ろミゴー攻撃と呼ぶべきであろうか)で貫かれており、その内容を改めて紹介するまでもないであろう。ミゴーが「ケルト」否定論をイングランドの反大陸的感情と政治的動機だと論断したことに端を発した議論ではあるが、ジェームズの反論も学問的立場を逸し、感情的になってしまっており、当事者以外の者にとっては、非常に不毛な論争になってしまった。

John Collis, “Celtic Myth” (1997年)は、様々な「ケルト」を巡る問題を考察するには、「ケルト」の研究史を押さえる必要があることを説く。彼は先ず古典を検討し、確かに「ケルト」は存在したけれども、どのような判断基準で「ケルト」という言葉を用いていたのかは不明であると結論する。次に、近代以降の「ケルト」については、ケルト人をケルト語を話す人々であるとするのは、ペズロン以降であり、19世紀後半、「文化集団」という概念が考古学において使用されるようになると、「ケルト」も文化集団の1つとして認識されるようになる。このように「ケルト」の変遷を概観した後、最後にラ・テヌ美術とケルトとの関連について、8つの疑問を呈する。即ち ① 古典におけるケルトの定義は曖昧で、ケルト人の起源や分布に関しても明らかでない。② ブリテン島の居住者がケルトと呼ばれるのは、16世紀以降のことであり、古典には基づいていない。③ 「ケルト語」という言葉は恣意的なもので、かつては「ガリア語」など他の単語を用いた者もいた。④ ケルト語を話す人々という定義は古代には適用できない。⑤ ケルト人の起源を北フランスから南ドイツとする考え方は、一部の古典に基づくものであり、正しくない。⑥ バイアスがラ・テヌ「文化」やラ・テヌ美術の起源について誤った像を与えた。⑦ ラ・テヌ美術の分布は、古代ケルト人の分布やケルト語の分布と部分的にしか一致しない。⑧ 古代のエスニック・グループと考古学の文化を同一視することは誤りである。

これらの批判に対して、J. V. S. Megaw & M. R. Megaw, “The mechanism of (Celtic) dreams?: a partial response to our critics” (1998年)は、先の論文の目的は、以下の2点を示すことにあったという。① 古代のエスニシティについて知るためには広範な文献を調査しなければならないということに関して、考古学者があまりに無知であることを訂正し、どんな時代のどのような人についてもアイデンティティの多重性を認識しなくてはならないこと、② 「ケルト」というラベルの歴史的「正しさ」に関わりなく、クリストファー・ホークスの主張する cumulative Celticity (Hawkes, “Cumulative Celticity”, *EC* 13-2, 1972, pp. 607-628) を支持する。その上で、現在のところ、「ケルト」より優れたラベルを誰も提示していないとして「ケルト」という言葉を使用することの妥当性を訴えている。結局、コリス

の提示した疑問点には答えておらず、説得力に欠けると言わざるを得ない。

編者は、イントロダクションにおいて、「ケルト」について、言語、アイデンティティ、物質文化の繋がりに関して合意は存在しないことを指摘し、文献史料に比重を置くことよりも、むしろ物質文化によってこそ、アイデンティティを理解するための道を開くことが出来ると説く。「ケルト」を巡る議論も考古学による「モノ」の研究が進めば決着がつくと考えているようである。その理由は明示されていないが、どうも考古学の理論が発展したことによるらしい。尤も、編者は new orthodoxy の立場に立つので、決着がつくということは、ミゴーのような考え方が淘汰されるという意味であろう。

筆者は old orthodoxy が正しいとは考えていないが、「ケルト」否定論に賛同しているわけでもない。近年、「ケルト」に限らず、歴史上のアイデンティティに関する議論が盛んである。そこでは、対象とする人々自身が自分達のアイデンティティをどこに求めていたか、自分たちのアイデンティティをどのように捉えていたのか、ということが重視される。「ケルト」の場合も同様であり、他者による記述によって「ケルト」が語られてきたことが「ケルト」を否定する論拠の1つとなっている。「ケルト」に関して言えば、彼ら自身による文字史料は極めて少なく、現存史料から、彼らが自分達自身のアイデンティティをどのように捉えていたのか知ることは出来ない。恐らく、new orthodoxy の人々が言うように、自分達が「ケルト」という文化集団に属しているという意識はなかったであろう。だからといって、「ケルト」という言葉そのものを使わない、また「ケルト」という言葉の使用を判断基準として、「古い」立場に立つ者と新しい見解に与する者というレッテルを貼るのは如何であろうか。

ケルト人を、ケルト語を用い、鉄器文化の担い手であり、ギリシア語で *Κελτοί, Γαλάται*, ラテン語で *Celtae, Galli, Galatae* などと呼ばれていた人々とする、「汎ケルト的」枠組みに問題があることは近年の議論により明らかとなった。しかし、近年の議論は「汎ケルト的」枠組みの影響力があまりにも強かったため、それに対する反動から、議論がラディカルになっているという印象を受ける。new orthodoxy にも問題点はある。もはや紙数も尽きたので、一例を挙げるにとどめるが、ブリテン島に住む人々を「ケルト」と呼んだのは、1582年のジョージ・ブキャナンが最初とされる。しかし、ビザンツの女性歴史家アンナ・コムネナの *Κελτοί* の使用例の中には、ブリテン島の住民を指していると思われるところがある。‘Celticity’ の部の Editorial Introduction において、アンナ・コムネナをエピグラフに用いているが、これが「ケルト」否定論の中にどのように位置付けられるのか、全く触れていない。筆者には、16世紀になって突然ブリテン島の住民を「ケルト」と呼ぶような考え方が現れたとは思われない。

お わ り に

本書は、雑誌 *Antiquity* に発表されたケルト関係の論文を1冊に纏めてくれている点、編者の Editorial Introduction によって、それぞれの論文の研究史上における位置付けがなされている点など大変便利である。しかし、編者は明らかに「ケルト」否定論の立場に立っているため、‘Celticity’ の部に関しては、中立的な視点から解説されてはいないことに留意する必要がある。なお、「ケルト」を巡る論争に関して、筆者とは異なる立場からなされた紹介に、田中美穂「研究動向『島のケルト』再考」(『史学雑誌』第111編10号, 2002, pp. 56-78)がある。興味のある方は併せて参照されたい。但し、田中氏の扱われた研究動向に本書は含まれていない。